

臨濟大師の教學的基盤（其二）

今 津 洪 嶽

正 宗 一

臨濟大師一代の善巧の教學的基盤と背景の那邊に存せしやを拜察し、接化の裏付けとなり軌道となつた教學的系統を明かにし、その輪郭の一般を判明せしむるを以て、本小稿の目的とすることは、序説に於て開陳した通りである。

それには、順序として、第一に大師の紀傳に關する諸文獻に基いて一般史實の上よりこれを考察し、第二に現傳臨濟慧照禪師語錄一卷の内容、特に上堂九章、示衆十四章、合計三十三章中の主要なる章に就て、内容的方面より、一應の検討を試みることにしたいと思ふ。

初に指摘さるべきは、住鎮州保壽嗣法小師延沼謹書。住大名府興化嗣法小師存獎校勘と署する臨濟慧照禪師塔記の所傳である——住鎮州保壽と云ふ保字、宋・悟明の聯燈會要、元・道泰の禪林類聚は、同じく保に作るも、宋・道原の景德傳燈錄、普濟の五燈會元には實に作る。存獎校勘の署は、延德三年版、寛永二年版、寛永十四年版、元祿十二年版等は、鎮州臨濟慧照禪師語錄（終）の後に記して、單に塔記のみに係らず、語錄一部始終の校勘の如くに署し、明萬曆丁未即ち卅五年刊本は、題して塔銘といひ、延沼謹書に次で小師存獎校と署し、禪家書林柳枝軒小川多左衛門刻の一本は、住大名府以下の一行を削つて居る。保壽延沼は傳燈錄の鎮州寶壽の沼和尚^{世住}第一で、存獎は魏府興化寺の存獎禪師である。大師の正脉を嗣ぐ、この塔記を宋・蹟藏主の古尊宿語錄第五興化存獎禪師語錄の卷末に、「臨濟慧照

「禪師塔記」と題して收載して居る點から合せて考へると校勘は塔記にのみ限られたるものと推考さるべきであらう。記して「幼而顯異。長以孝聞。及落髮受具居於講肆。精究毗尼。傳讀經論。俄而歎曰。此濟世之醫方也」云云と見える。毗尼即ち律藏の研鑽に勉められしは、馬祖、百丈、南泉、鴻山、大慈、仰山、石頭、天皇、德山、清平、夾山、岩頭、雪峰、雲居、大梅等の諸德に同じく、大師は實に戒珠玲瓏、律僧的生活をなされた方であることは、行錄に、師初め黃檗の會下に在りて行業純一なりと記述せられ、睦州の陳尊宿をして、是れ後生なりと雖も、衆と異なることありと歎ぜしめた所以であつて、それはもとより、幼にして顯異なり、長じて孝を以て聞ゆといふ天稟の然らしむるところなりとは云へ、また精しく毗尼を究められて勤苦精進せられたことに基くことは、後學の範とすべきことであろう。落髮受具するに及んで講肆に居れりといふ、臨濟大師の世壽並に法臘は、もとより文獻の徵すべきものを缺くが、これを綜合判斷するに、大體に於て六十歳から六十五歳前後で、六十歳 巖頭 六十歳 曹山 六十歳 洞山 六十歳 樂普 六十歳 諸老と、ほゞ其の在世年數を同じくすと判じて、大差あるまい。示寂年月に就ては、唐懿宗の咸通七年説と八年説の二説を存するが、その何れにするも、前記の在世年數を基礎として逆算するに、大師の降生は、唐・德宗の貞元の末年、又は憲宗の元和の初年頃に求め得よう。即ち圭峯宗密の降生と、天台の第六祖荆溪大師湛然の示寂建中二年二月寂一説興元元年寂に後るること約二十年である。寛永十二年版人天眼目抄に依ると、大師が初めて黃檗に參ぜられしは、十八歳の時なりと見えるが―如何なる史料に基けるや判明せず―凡そ受具は、四分律第三十四に「年未だ二十に滿たざる者には、具定戒を授く可らず。何を以ての故に、若し年未だ二十に滿たざれば、寒熱飢渴風雨蚊蠱毒蟲を忍ぶに堪へず、及び惡言を忍ばず、若し身に種種の苦痛あれば忍ぶに堪へず。又持戒及び一食に堪へず。若し度して出家し具足戒を受けしむれば、當に法の如く治すべし。阿難當に知るべし、年二十に滿たば如上の衆事に堪忍せん」と規定せらるゝが如く、具足戒を受けんと欲する者は、少壯にして能く事に當るに堪へ、身體强健にして諸根具足し、病患聾盲等の衆患なく、身器清淨にして、邊罪、犯比丘尼、賊住等の雜過無く、出家の相を具し、髮を剃り袈裟を披り、而して既に沙

彌戒を受けたる者に限り、其の年齢は滿二十歳以上、七十歳未滿を本制とせられる。従つて嚴に律制が遵守せられた唐代に於ては、大師の受具も、滿二十歳に達せられし後と判するを妥當としよう。この故に貞元の末年、又は元和の初年頃に降生せられし大師は、憲宗の長慶四年、又は敬宗の寶曆一・二年の頃に具足戒を受けられたと判すべきであらう。長慶四年は、正月烏窠道林示寂、六月丹霞天然示寂、十二月韓愈卒、寶曆元年、戒行の者を擇んで大德と爲し、試經得度せしめ、二年、豫章の東明寺を世福寺と改め、戒壇を建てられ、洪州寶曆寺にもまた僧尼戒壇が建てられた。而して杭州の龍興寺に華嚴經社を結んで、道俗十萬人に勸むるに華嚴經を受持すべきを以てせられ、詩人白居易がその記を作つたのもこの年のことである。

塔記に「落髮受具するに及んで、講肆に居り、精しく毗尼を究め、博く經論を讀る」といふを、元・武宗の至大二年、趙孟頫即ち有名なる趙子昂が奉勅撰録した臨濟正宗碑には、簡單に「遊學江右」とのみ記載せられて居るが、元・世祖の至元二十四年、釋教總統雪堂普仁が「臨濟錄重開者——淨慈寺愚極至慧、靈隱寺玉山德珍、徑山寺虎巖淨伏等の諸德の應援を得て、立石建碑した眞定十方臨濟慧照玄公大宗師道行碑銘には、「幼喜佛氏之學、既落髮受具、即留心於經論、窮幽探蹟」と、受具即ち二十歳前に、既に佛氏の學を喜び、修學研鑽せられたるを傳へる。案ずるに、四分律第三十四に、「自今已去、父母聽さざれば度して出家せしむるを得ず、乃至、年減十二なるものを度するを得ず」と見えて、年十二に滿たざる者、父母の聽許せざる者、並に諸種の疾病ある者等は落髮得度せしむべからざるを原則とするから、大師の落髮得度も、恐くは滿十二歳の時なりしなるべく、それより以後二十歳の頃に至るまでは、その落髮剃度せしめられた受業師のもとにて、佛典の研鑽その他に精進せられ、他日即ち受具の後、講肆に列りて、遊方研鑽する基礎的智識を修得せられたものと解し得よう。

南唐の保大十王歳、即ち後周太祖の廣順二年——後漢隱帝の乾祐二年即ち保大七年四月雲門文僊示寂。十年、大師の神足興化存獎の法嗣汝州南院の慧顯示寂——泉州招慶寺文一作省燈の徒、靜、筠の二禪德に依りて輯録せられた祖堂集。

招慶省僮の序あり、僮は雪峯義存の神足保福從展の法嗣たり。傳は景德傳燈錄第二十二、五燈會元第八に見えたり。第十九卷所收臨濟和尚傳を檢すると、「黃檗和尚告衆曰、余昔特同參大寂道友、名曰大愚。此人諸方行脚。法眼明徹、今在高安、願不好群居、獨栖山舍。與余相別時、叮囑云、他後或逢靈利者、指一人來相訪。于時師在衆聞已便往造謁。既到其所、具陳上說。至夜間於大愚前、說瑜伽論譚唯識。復申問難。大愚畢夕峭然不對。及至旦來謂師曰、老僧獨居山舍、念子遠來。且延一宿。何故夜間於吾前無羞慙放不淨。言訖杖下之數下、推出關却門。師廻黃檗復陳上陳」と見える。黃檗と大愚との關係、大師と大愚との初相見、大愚の機鋒等は、この記載あるに依りて充分に知られ得るが、それにも増して尊重すべきは、瑜伽論を説き唯識を譚ずの一句である。以て大師の教學的方面の一端を推知し得られることは誠にありがたいと思ふ。耕雲子の臨濟錄摘葉―元祿九年著、十一年京都書肆田中庄兵衛刊―第四卷に依ると、「余思ふに、師本と華嚴宗なる故か、已下錄中に多く華嚴の意を用ふ。此の錄を看せん者、先づ華嚴を詳にして、而して後、此の錄を看ば、當さに雲霧を抜いて蒼天を觀るが如けん」と見える。これ大師の教學的基盤は、華嚴教學にあることを唱破したもので、誠に卓見といふべきである。即ち本錄に、各種の經論章疏が自由に援引せられて居るのを檢すると、華嚴經を初め、圓覺、維摩、楞伽、首楞嚴、涅槃、法華等の諸大乘經を初め、四十二章經、起信論、信心銘、證道歌、達磨血脈論、證道歌、懶瓚歌等等が、縦横に援引せられて居つて、摘葉の主張の決して妄ならざること裏付けると推考せられて、その主張の依つて甚く文獻的支證を闕如いては居るが、極めて安當な説であると考へられる。正燈圓照禪師隱山和尚の手澤の講本に、「始は華嚴宗也」と傍註せる、蓋し恐くは摘葉の所説を採録したものであらう。

寶壽延沼の塔記次下の文に依ると、「俄に歎じて曰く、此れ救世の醫方なり。教外別傳の旨に非ずといつて、即ち衣を更へて遊方す。首め黃檗に參じ、次で大愚に謁す」と見え、道行碑銘には、「既にして曰く、此れ濟世の醫方なり、教外別傳の旨に非ずと。遂に事に禪宗に従ひ、黃檗運禪師に參ず」と傳える。「首め黃檗に參じ、次で大愚に謁

す」といへる、次下の文に「其の機縁語句、行録に載せたり」と記するに照合して、祖堂集の所傳の史實なるを裏付けるものと考へ得るが、それは兎に角として、大師が更衣遊方して黃檗の會裡に参じられたのは、滿二十歳にして具戒を受けられたとして、塔記その他に、「講肆に居り、精しく毗尼を究め、博く經論を讀る」に照して、少くとも三・五年後のことと推せられる。即ち最少限度二十三・四歳より、二十五・六歳の頃かと考へ得る。瑜伽を究め、唯識を學び、華嚴の教學に通ずるには、大師如何に「穎異」なりとするも、少くとも五・七年の修學期間を要するからのである。臨濟録の行録の部に、睦州陳尊宿が、「是れ後生なりと雖も、衆と異なること有り。遂に問ふ。上座此に在ること多少時ぞ」と、大師を喚ぶに「上座」の語を以てせる、上座の稱呼は「夫れ上座とは、心安住するが故に、世の違順のために傾動せられざる、是れを上座と名づく」。又は、「十法を具するを上座と名づく。謂く住處ありて畏れ無く、煩惱無し。多知識多聞、辯言具足、義趣明了、聞者信受、善能く安庠として他家に入りて白衣の爲めに法を説いて他をして惡を捨て善に従はしめ、自ら四諦の法樂を具して乏しき所あることなきを上座と名づく」。或は「二十夏より四十九夏に至るまでを上座と名づく」等と定義せられて、たとひ老少を論することなく例して上座と稱すとしても、大師の法嗣中に於ける定上座、齋上座、又は雪峰門下の太原孚上座等の上座の稱呼のやうに、相當の年齒に達し、學と徳とを具備するにあらずして、上座の稱呼を用いることは、あり得べからずと考へられるから、この點よりしても、大師の黃檗に参じたのは、二十五・六歳の頃で、或は三十歳にも達せられた頃と推定し、更に爾後三年の年時を経過して、初めて三度佛法的の大意を問ふて、三度黃檗より杖を賜ふの活劇が行はれたことと推定して、大した間違はあるまいと思はれる。

轉じて更に考ふべきは、然らば大師は、その落髮の當時は、何れの教學に歸依信順して沙彌となり、受具前後には、果して何人に師事して、教學の方面の指導を受けられたかの問題である。文獻の何等徴すべきもの無きが故に、たゞ現傳臨濟録の内容に就ての綿密なる分析的研究の上より綜合判斷より外はないと考へられる。

假りに大師の降生を、貞元の末年、又は元和の初年頃とし、その受具は敬宗の寶曆、又は文宗の太和の初年頃と推定して、これを當時の教界の趨勢を背景として考察すると、當時の教界の趨勢は、三論教學は既に久しく人無く、先に旭日東天の勢を以て中外を震撼した玄奘・慈恩等の諸德に依る瑜伽・唯識の教學も、惠沼・智周等の諸德ありと雖も、教勢また昔日の如くならず、天台教學に在りても、荊溪湛然の示寂を去ること約五十年の後に屬し、門下に道遠・行滿・智度等の諸德あり、明曠・廣修・物外等の諸師これに繼ぐと雖も、早くも衰色を呈し來つて、再び昔日の觀を留めず。たゞ華嚴賢首の教學のみ、清涼澄觀・圭峰宗密の兩師の出世するありて、當時漸く全盛を極むるに至りし達磨門流の佛法と、稍や齊肩的地歩を占めしに過ぎない―併し涼・密の兩師に依りて代表せられた華嚴教學も、いはゆる教禪和合の名に依りて稱せられる如く、禪と融合會一することによつて、漸く存在理由を明かにしたのに過ぎないことは、宗密の禪源所詮集都序に「今時禪者、多不識義。故但呼心爲禪。講者多不識法。故但約名說義。隨名生執。難可會通。聞心爲淺、聞性謂深。或却以性爲法、以心爲義。故須約三宗經論相對照之。法義已顯但歸二心一自然無事」云といふもの、能くこれを證する。―蓋し當時の人心の歸趨するところ、已に煩瑣なる名相の學に飽いて、簡明直裁なる實踐實學を尙ぶやうになつた必然的歸結である。臨濟大師が、「此れ濟世の醫方なり。教外別傳の旨に非ず」と斷ぜられた所以も、恐らくこゝに存するであらう。

中國の華嚴教學史上、第四祖とせられる清涼大師澄觀は、法を五臺の無名に嗣いで、南宗荷澤神會の法脈を繼ぎ、徑山道欽に牛頭禪を、又慧雲に參じて北宗の玄理を究めた達磨門下の法將であり、同じく第五祖とせられる圭峰宗密は、又同じく荷澤神會、磁州法如、荊南惟忠と次第する大德道圓に嗣法せる達磨門下の尊宿であることも、改めて想起さるべきであらう。

清涼大師澄觀は、唐玄宗の開元二十五年降生、肅・代・德・順・憲・穆・敬・文の九朝を経て七帝の師範となり、開成三年三月、宋・高僧傳作百有二歳の長壽を保つて示寂した人である。俗姓は夏侯氏、會稽山陰の人、天保九年、

十四歳にして寶林寺常禪師の室に投じて落髮。沙彌の時已に九經十四論を講じたと傳へられる。肅宗の乾元中、二十餘歳にして、潤州棲霞寺の醴律師に侍して法蘊の相部律を學び、又、曇一律師に謁して道宣の南山律を修めた。荆溪湛然また曇一に學ぶ。當時金陵に玄奘法師あり、關河の三論を傳へて名あり、即ち就て學ぶ。江表に三論の盛なる

は、一に澄觀の力に依ると傳へられる。代宗の大曆中、瓦棺寺に在りて、起信・涅槃を傳へ、淮南の法藏に海東の起信論疏を學んだ。錢塘天竺寺の法旆代宗・大曆十三
年十一月示寂は、華嚴を靜法寺慧苑——華嚴教學の大成者賢首大師法藏の神足である。

續華嚴經刊定記十四卷の著者であるが、古來、華嚴教學の異轍を以て稱せられる——に票けて、また當代の法將である。即ち就て華嚴大經を學ぶ、澄觀が華嚴圓宗の復興を以て任とするに至りしは、この時に起因する。代宗の大曆七年、剡溪に遊び成都の慧量に謁して、重ねて三論を究め、十年、三十八歳にして、蘇州に到り荆溪大師湛然に侍して、天台の止觀、法華、維摩の疏を修めた。他日華嚴大疏を著して、性具性惡說を唱導するに至りしは、この時に起因すと云はれる。荷澤の宗旨を究め、南北の兩宗に通ずるに至つたことは、前に解説したとほりである。宋・高僧傳に依ると、師は經傳子史百家の書、諸部の異執、四圍・五明、悉曇・秘呪、儀軌・篇頌書蹤に至るまで、悉く翻習して博綜せざるなしと傳へる。大曆十一年、四十歳。五臺山に聖跡を巡禮し、尋て峨眉に普賢に謁し、再び五臺に還つて、大華嚴寺に住し、専ら方等懺法を修行した。寺主賢林大德、篤く師を請して、華嚴大經及び諸經論を講ぜしめた。即ち發願して華嚴大經の疏を製せんとし、德宗の興元元年正月起筆、前後四年を経て、貞元三年十二月業を終へ、即ち千僧を齎して度讚の意を表した。華嚴經疏二十卷これである。その後弟子僧叡等の請するあつて、更に隨疏演義鈔四十卷を著した。華嚴經大疏鈔八十卷は、後人が此の兩疏を會合したものである。貞元四年正月、大華嚴寺に華嚴經疏を講じ、七年、長安崇福寺に重ねてこれを講じた。十一年、五十八歳。十一月、南印度烏荼國王、手書の華

嚴經普賢行願品の梵夾を買す。即ち勅を奉じて、般若三藏と共に、崇福寺に於て翻譯の業に従ひ、西明寺圓照等の諸法師とともに閩文證義の任に當り、三年にして功畢る。華嚴經四十卷これである。此の年四月、德宗の誕辰に當り、勅を奉じて内殿に華嚴經を講じ、清涼法師教授和上の號を賜ふ。憲宗の元和五年、七十三歳。勅を奉じて華嚴の宗要を説く。帝豁然として得るところあり、有司に命じて金印を鑄し、國範統に叙し、大統清涼國師の號を賜ふ。會て順宗東宮に在りしとき、師を召して佛法の大意を問ふ。答ふるに唯心の理を以てせるもの、即ち五臺山鎮國大師澄觀答皇太子問心要景德傳燈錄第三十所收略して清涼心要といふものこれである。師深く心を華嚴に皈し、専ら圓宗の興隆を以て任と爲し、常に大經を講じ、凡そ一代を通して講讀五十餘遍に及んだと傳へる。附法の門弟凡そ一百餘人、中に於て、圭峰宗密、東都の僧叡、海岸の寶印、及び寂光法師の四哲が、最も著はれて居る。

以上は清涼一代の概観であるが、臨濟降生の貞元の末年、又は元和の初年頃は、清涼七十歳前後、落髮當時は八十歳前後、受具前後は八十歳前後で、清涼の入滅は臨濟の三十歳前後であることは、極めて注意すべく、清涼の所住が主として黄河以北即ち山西、陝西の兩者であり、臨濟が曹州南華即ち河北に生れ、その一化は鎮州城、河南府、大名府等同じく河北であつたことも忘れてはならないことと思ふ。

圭峰の宗密禪師は、俗姓は何氏、果州西充の人、その降生は、德宗の建中元年、即ち臨濟の降生に先つこと凡そ二十五年乃至三十年で、示寂は武宗の會正元年正月一説開成四年一説五年寂、即ち臨濟が黃檗又は大愚の會下にあつたときである。幼にして儒學に通じ、德宗の貞元二十年、二十五歳にして、荷澤神會の玄孫道圓の室に投じて落髮し、南宗の禪法を受けた。會て衆と共に州吏任灌の齋に赴き偶ま圓覺經を得た。これを讀んで未だ卷を畢らざるに廓然感悟するところあつたと云はれる。これより道圓得法の師荊南の惟忠に參じ、更に洛陽の神照の室に入り、並に玄旨を得た。後、終南山智炬寺に入り大藏を閲すること三年、元和五年、三十一歳にして襄陽に入り、初めて清涼の華嚴大疏を見て、欣然讀下し、直にこれを講ず、これより心を華嚴に皈し、轍を移して華嚴の宗師となつたが、未だ師承無きを以て、自

ら意に安せず、即ち書を清涼の許に致し、弟子の禮を執てその所懷を述べた。清涼見て復箋して云く、「汝所解猶吾之心。輪王眞子、誠所謂也」と。師大に喜び、上都に於て親しく清涼に謁し、爾來側近に侍すること數年、専ら華嚴を學び、具さに指決を稟けた。清涼褒美して云く、「昆盧華藏、能隨吾遊者其汝乎」と。師資の密付以て知るべしである。華嚴、圓覺、金剛般若、孟蘭盆等の經疏を初め、起信、唯識、四分律等の疏鈔を製して、法門の興隆に精進したが、中にも圓覺經には、略疏、略疏鈔、大疏、大疏鈔を製し、別に圓覺修證義を著はして、教・行二門にわたつて、教旨の弘通と實修につとめた―宋代に入り、長水子璣、晉水淨源、五台承遷等諸師に依る宋朝華嚴の一派並に揚岐派下密菴下の破菴祖先、無準師範の門流が、圓覺經を重視するの家風はその端を宗密に發する―尙ほ宗密に禪源所詮集都序並に原人論の著あるも又指摘すべきであらう。その一代所住の地が黃河以北特に山西であることは、ほど清涼に等しい。

以上は涼・密二師の學系を中軸とした紀傳行實の一斑であるが、これを背景として、吾が臨濟大師の降生より、黃檗大師の會下に參せられた推定年齒とを對比圖示すると、

王帝	號年	德貞元	宗十九	宗二十	宗順元永貞	憲元元和	二
臨濟	降生						
清涼		六五	六六	六七	六八	六九	七〇
圭峰		二三	二四	二五	二六	二七	二八
王帝	號年	八	九	十	十一	十二	穆元長慶
臨濟	一二度得						
清涼		七六	七七	七八	七九	八〇	八四
圭峰		三四	三五	三六	三七	三八	四二

宗 敬		宗		
二	元寶曆	四	三	二
		二〇具受		
八	八	八	八	八
九	八	七	六	五
四	四	四	四	四
七	六	五	四	三
		宗 文		
		四	三	二 太和元
		二五講肆 期間		
九	九	九	九	九
三	二	一	〇	〇
五	五	四	四	四
一	〇	九	八	八

而して、茲に忘るべからざるは、涼密の兩師、並に學は外を兼ね、教禪・顯密・性相その何れも往くとして可ならざる無く、然も兩師の何れも教禪の和合融會を、中國華嚴教學史上の特色とする點である。然るに子細に涼密兩師の教禪和合説を點檢するに、清涼は教禪和合を主唱しつゝも、その重點を寧ろ華嚴教學に於けるに對し、宗密は華嚴教學に立脚しつゝも、極めて圓覺經を重視し、禪源諸詮集都序の如きを撰して、教禪均等、寧ろ禪に重點を於けるの差異を見ることである。宗密の圓覺經略疏鈔第二に曰く、「良以此經、具法性・法相・破相三宗經論。南北頓禪兩宗禪門、又分同華嚴圓教、具足悟修門戶、難得其人也」と。圓覺經を重視し、その研鑽普及に全生涯を捧げた所以になるとともに、その意趣とするところを推知し得よう。更に清涼が華嚴教學の大成者賢首大師法藏の、性相融會即ち新譯家の玄奘・慈恩の諸德に依る瑜伽・唯識の教學が、五姓各別の宗義を立て、新來宗教の勢を以て從來舊譯家の一切皆成の性宗を壓せんとするの潮流あるに對し、一面はそれを破斥すると共に、一面には巧に性相兩宗の調和の道を開かんと試みたるに對し、涼師に至りては、時代の推移は、法相の教學は、既に過去し去りし故を以て、性相の融和和會の立場より、百尺竿頭一步を進めて、性相決判の立場に立ち、法相は始權三乘の教なるが故に、到底華嚴一乘圓教とは齊肩し得べからずと斷ぜしとともに、教禪和合、即ち新興の達磨門葉の宗旨との融和和會を試みんと企

てたる點は極めて重視さるべきことである。宗密その意を票けて、更に一步を進めしは、前に解説せるが如く、而して臨濟は、更に百尺竿頭一步を進むるあり、「俄にして歎じて曰く、此れ濟世の醫方なり。教別別傳の旨に非ずと、即ち衣を更へて遊方」して、初祖・六祖の嫡流黃檗に參し、後に鎮州臨濟院に住して、參學の士に示すに、「若し山僧が見處に約せば、釋迦と別ならず。今日多般の用處、什麼をか缺少す。乃至此の三種の身は是れ儼が即今目前聽法底の人なり。たゞ外に向つて馳求せざるがために此の功用あり。經論家に據らば、三種の身を取て極則と爲す。山僧が見處に約せば然らず」又は「道流、佛の得べき無し。乃至三乘五性、圓頓の教迹、皆これ一期の藥病相治なり。並に實法無し。たとひ有なるも、皆これ相似の表顯、路布の文字のみ」と云ひ、要約して「道流出家兒、且く學道を要せよ。祇山僧が如んば、往日曾て毘尼の中に向つて心を留め、亦曾て經論に於て尋討す。後方には是れ濟世の藥、表顯の説なることを知つて、遂に乃ち一時に抛卻して、即ち道を訪ひ禪に參ず、後大善知識に遇うて、方に乃ち道眼分明にして、始めて天下の老和尚を識得して、其の邪正を知る」と驚異すべき爆彈的宣言を敢てして、教内所傳の顯密・性相の一切の諸教學を粉細し去つたことは、三國を通ずる佛教教學史上の痛快事で、臨濟の眞面目は實に茲にありと斷ぜざるを得ないと考へる。幸に兒孫あるありて「五逆聞雷」と評せる所以である。若し夫れ教學的用語を以てすれば、賢首の性相融會より、清涼の性相法判、教禪和合に推移し、教禪和合は聽て宗密の禪主教從の教禪融合となり、遂に我が大師に依りて教禪決判となつたと表現し得られよう。

以上これを要約して考察するに、我が大師は、幼にして長安崇福寺又は五臺山大華嚴寺に、清涼大師澄觀又はその門下の何人かに依りて出家受法し、瑜伽・唯識・起信その他の諸教學を學び、清涼の老後、多く宗密に依りて華嚴その他の教學を修め、宿縁の催すところは、聽てこれ濟世の醫方なりと一切を抛却して黃檗に參するに至つたものと判ぜられる。涼・密二師の眞意を洞察した歸結たるは、もとより考へ得ることで、所謂「幼にして穎異」、「衆と異なり」ところ有」りし所以であらう。